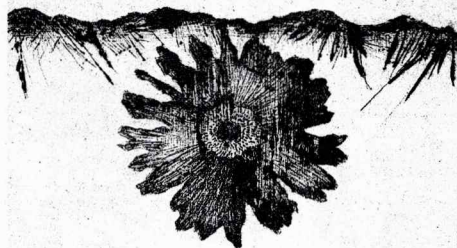


朝日 歌壇 俳壇



山の中のガーベラ 岩尾恵都子

俳句時評 沈潜の果実

「青空のこまで降りて菊薫る」は、十二月刊の『大峯あきら全句集』(青磁社)所収。作者は二〇一八年に八十八歳で逝去。その最晩年の作だ。漂う菊の香にかぶさるような空がある。

「がちやがちやはまつ暗がりの庭に鳴く」は豊年や暮れてしまへば大月夜、白雲のいくつもあつて十三夜、秋風のまつすぐに来る門のあり、なども単純な句姿ながら景を叙して間然とするところがない。いずれも逝去の前年の発表だ。

「ねこじやらし過去ごとく風に失せ」は、一月刊の『綾部仁喜全句集』(ふらんす堂)所収。「ゆくりなく伸びる髪かも梅雨も老い」と詠んだ作者は、二〇一五年に八十五歳で逝去するまでの十余年を入院病臥。掲句はそのさなかの作で、エノコグサを眺めながら、風に吹かれるように失せ去った過去を思う。「耳掻きの尻と頭や鬚雲」は仄かなユーモア。「へいちまの恐ある桜月夜かな」は単純化の妙。人工呼吸器を使う病状なものと

「から」立春の蚊がゐる重き胸の上」は、諸詩を忘れていない。以上二冊から引いた句はいずれも句集未収録。最晩年の作品が読めるのは全句集のありがたみだ。

大峯は平成三十年、綾部は二十七年没。ともに「平成」の主要な俳人に数えられる。この時代は、揶揄的に「平成無風」と呼ばれた。活発な論争がなく、斬新な作風・俳句観が出現しなかった時期という意味だ。真に「無風」だったかどうかはともかく、大峯や綾部の作品は、平成の「沈潜」の果実として評価し得るものと思う。

風信

斎藤美衣歌集「世界を信じる」 30代初めから約17年間の作品を収めた第1歌集。「母さんと呼ばれてはい、と返事して。返事して、返事して、もう夕映え」(典々堂・2970円)

井上法正歌集「すべてのひかりのために」 8年ぶりに刊行された第2歌集。「水際はまだこわくない 踏み込んで、おいで すべてのひかりのために」(書肆侃侃房・2200円)

☆は共選作。入選作はデジタル版などにも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のほかは1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。ネットからも投稿できます。お問い合わせは03-5561-0001まで。

永田和宏選

夕方を捨て切れぬ空へアケセル踏み小さく
なつた母おいていく (横浜市) 清水 尚子
もし俺がいなくなつたらと教えたが事はい
とも聞きたくはない (佐渡市) 藍原 秋子
爪楊枝刺して煙草を吸っている男をもう見
ない路地裏 (観音寺市) 篠原 俊則
あなたへの優しい言葉探しては掛ける私が案
になるため (高崎市) 小出美恵子
キヤタビラの轍を深く残す道たどりで帰るガ
ザの人びと (八尾市) 水野 一也
大地震の波形の如き筆跡でトランプ大統領は
次々と署名す (山口県) 末広 正巳
☆地震にて隆起をしたる岩場にて岩海苔を摘む
能登の女性ら (石川県) 瀧上 裕幸
根元から伐られしサクラの切り株の隅に置か
れしワンカップ酒 (つくば市) 山瀬佳代子
カバより透けて見えにしゆすけは清らかに
咲きて歌集の扉 (水戸市) 佐藤ひろみ
偶然にめまの検査で見つかった「もやもや
病」は脳に爆弾 (東京都) 阿部 藤子

【評】清水さん、施設に母を置いて帰るのだろうか。作者の心残りが上句に。藍原さん、死後のことを伝えたがる夫。そんなこと聞きたくないのに。篠原さん、いたよなあ、こんな男たち。十首目、モヤモヤ病の遺伝子は私の研究室で同定した。

馬場あき子選

スーダンを離れし後はガザへ行く君は国境な
き医師団員 (大分市) 岡 義一
駅伝の走り走りて着き空修行僧のごと校りし
からだ (備前市) 近藤 佳加
雪の夜「テンバスト」弾きながら知る真冬の
この上ない静けさを (富山市) 松田 わて
☆地震にて隆起をしたる岩場にて岩海苔を摘む
能登の女性ら (石川県) 瀧上 裕幸
雉を見る小鰻鰻を見る許可を得て落葉掃きす
る寺領の山に (所沢市) 若山 巖
直筆の受講ノートを売っていた六十年前の神
田の古書肆 (三浦市) 秦 孝浩
虫たちの世界は彩にあふれて冬にたのしみ
昆虫図鑑 (蓮田市) 斎藤 哲哉
我よりも妻愛めくれる隣人の言葉を妻に語る
喜び (観音寺市) 篠原 俊則
晴れた大寒の朝を着膨れて紅猿子鳥見む
と高尾まで来ぬ (東京都) 上田 国博
ひっそりと山羊小屋に寝て春を待つ黒山羊白
山羊静いもせず (佐世保市) 近藤 福代

【評】第一首は国境なき医師団員のガザへの転出。エジプト経由のきびしい道程と今日の不安定な状況を思う。前途の幸運を祈る。第二首のランナーの身体。修行僧との比喩と比較が拔群。第六首、今日からは考えられない光景だが事実あった。

佐佐木幸綱選

丹沢に雪降らせるむ鈍色の雲捲きて離る
もせず (多摩市) 豊間根則道
鹿が来る猪もくる棚田にて五歳の孫の風あけ
を見る (南あわじ市) 松島 弥生
猪を鹿を閉め出す防護柵村中に張り人閉じ込
める (竹田市) 伊藤信一郎
梨百本伐りたる畑のむこうにはひとすじの道
バス稀に行く (福島市) 青木 崇郎
つばくろの菓立を待ちて店仕舞う店主夫妻
に風のさやけ (佐倉市) 難波亜姫子
今日よりは片眼霧視なり受け入れて深く生き
よう強く生きよう(東京都府中市) 大根田真里枝
寒椿の厚く艶ある葉の緑消して朝日がまぶし
く光る (鴻巣市) 松橋 雅実
いる場所はGPSで分かるけどやっぱり欲しい
「着いた」の知らせ (横浜市) 吉澤 信子
☆地震にて隆起をしたる岩場にて岩海苔を摘む
能登の女性ら (石川県) 瀧上 裕幸
アレクサに「ラジオ体操第一」と声かけ始め
る子の出版社後 (橋本市) 秋月 晶江

【評】第一首、渦を巻きつつ丹沢山から動かない冬雲。ゆったりとして厚みのある風景詠。第二、三首、鹿と猪が出てくる歌が二首並んだ。第四首、梨農家が梨の栽培をやめたのだろう。昨年までとはちがう風景が印象的な一首。

高野公彦選

恐ろしいや突然路面陥没す「楽しい日本」総理
脱ぎしに (茨城県) 渡辺たかし
増税とインフレ進み実質の賃金目減りし「楽
しい日本」 (神戸市) 前田 達生
一時帰国したる夫が持ち帰る十数種類のふり
かけふりかけ (オランダ) 宮沢 洋子
海底へ伸ばすサグラダ・ファミリアのごとき
か辺野古の難工事の今 (京都市) 森谷 弘志
大きめの軍服まとい銃を持つミランマー兵の
顔あどけなし (中津市) 瀬口 美子
大寒の長引く咳を止めたのは妹の生姜もそち
やんこ鍋 (富山市) 松田 梨子
掘りたての葉付き大根「全身をいただきます
す」と撫でつつ洗う (横浜市) 大曾根藤子
風止みて冬の光の心地よく小啄木鳥探しに靴
選りて行く (小平市) 真鍋 真悟
強さだけでない横綱照ノ富士七転び八起きの
生きさま残す (川西市) 青柳 正也
半世紀ぶりの生徒を駅で待ち携帯鳴らせばす
ぐそこにいた (横浜市) 島巡 陽一

【評】1首目と2首目、総理は「楽しい日本」と言ったが、実際は危ない日本、苦しい日本。3首目、日本のふりかけの美味しさ。4首目、あのガウディの建築物は百年経っても未完成で建築中。あれはいいけど、辺野古はいいのか、と問う。